新刊紹介

武士と剣の実像求めて

ひとくちに武士だの侍だのとわかった風に人はいうが、本当はいかなる存在だったのか。その実像に真正面から迫ろうとした著者・好村兼一氏（58歳）の作家デビュー作品は、これまでの時代小説には見られない繊細性と電撃性で読者の胸倉を摑む。表紙帯に縄田一男氏が「時代小説の新しい風が心地よく頬を打つ…。本書との出会いはまさに事件である」と評しているが、これは額面通り受け取ってよいだろう。

まず、著者自身が円熟しつつある剣道教士八段であり、真剣での居合道稽古も積んでいることだ。竹刀稽古、木刀形稽古に加え、その原点である日本刀を日々取り扱い、始末している著者にして初めて着想されるプロットだ。小説の主人公・宍倉六左衛門は61年の生涯をある日、パタと閉じる。意表を衝く結末までに巧みな伏線が張られ、最後の1ページで思わず人は唸る。

1本の鋭利な金属である槍、剣は、武器としてすぐれた機能と美を備え、心して手入れ所持する人間の魂をも象徴するものであるが、古来剣を「神聖なるもの」とする真の由縁は、単に所持する人間のありようを超え、それは天地を結ぶ宇宙原理の一環に位置づけられる、と著者は喝破するのである。木刀や竹刀では、こういうことは起こらない。

恐らく日本刀に限らず、古今東西で作られ使用されたさまざまな刀剣すべてに共通する「神聖性」が、六左衛門の出来事でひょいと明らかになってしまう。確かに、これはまさに大事件なのである。著者は易の卦「天雷无妄（てんらいむぼう）」（ありのままの天に対し、人間の作為はいらぬ）という言葉を好む、と「あとがき」に書く。これをいいたいがために、ひたすら長く剣道を続け、いまごろ作家となった著者の人生は、これはこれで、もうしょうがないのであろう。

著者はフランスに永住しており、本人の信仰心はなんであれ、周囲の建造物、慣習、暦、行事、政治経済は、ユダヤ教とキリスト教と反・異端、キリスト教、そして同じ一神教のイスラム教同士の現在進行形・葛藤劇場に生きてきた。それ故なのか、本書に登場する「島原の乱」の指導者・キリシタン天草四郎の姿、思考、言動、それを弾圧、抹殺する江戸幕府体制との観戦記風記述は、一般の日本人作家ではとうてい描き切れない真実味と脚色がある。

そして、江戸時代の侍生活の実情を丹念に考証する著者の目は、極めて冷静で客観的だ。かつて作家・故堀田善衛氏がスペインに一時移住し、膨大な資料と取り組み、『定家名月記私抄』（新潮社）を著したが、平安貴族階層の生活が、いかにまがまがしき似非優雅（えせ）であったか、との内容も思い出される。「外にいてかえって、日本人が、日本の歴史が、よく見える」という氏の言葉が、いまの好村氏にも繋がっているように感じられるのはどうしたことか。

六左衛門が「61歳」という年齢で没するのは、著者のある意図が秘められている。すなわち、団塊世代が還暦定年を迎える昨今、かつての武士階級層は、現代のサラリーマン、公務員になぞらえるという暗示なのだ。藩が崩壊することは、つまり会社倒産、自治体破産。幕府、役人腐敗は今日の行政府破局であり、個人的なリストラ、失職はこれ浪人生活、ホームレスなのである。

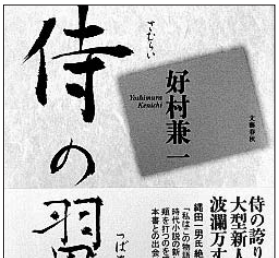
侍は誇りを失うまいとする一方、糧を求めてどろどろの労苦にさいなまれる構造、昔もいまも変わらない。著者自身も団塊の世代であり、また大学時代に日本を離れ、異邦の地で弧絶した魂を抱えた経験が、遠く昔の戦闘なき鎖国社会と侍たちの屈折した姿を、かくもリアルに穿ったようである。

本書出版の少し前、あの『ノルウェイの森』の著者・村上春樹氏が『走ることについて語るときに僕の語ること』（文芸春秋社）という自伝を書き下ろした。新聞書評には「いまノーベル文学賞に一番近い日本人作家」ともあるが、作家であり同時にセミプロ級の長距離ランナーである本人、58歳までの人生を初めて率直に振り返ったルポである。

多くの村上ファンは、彼がここまで真剣に毎日走ることを知らなかった。「書くことと、走ることは一体である」というそのままの告白に仰天するのである。そして、好村兼一氏の「天雷无妄（てんらいむぼう）」という言葉が村上春樹氏の近刊でそのまま裏打ちされていることが分かるとき、なにか人類の普遍性が浮かんでくるのだ。

同年齢の文士、剣士の2人はあたかもこういっているようだ。現代日本の「侍」や「文武両道」とは、つまり広く世界に触れる不安と緊張の中で、その仕事はなんであれ、いかようであれ、無心に辛抱強く一所懸命であればみな善し、と。それを響き（サウンド）から理念（イデー）へと昇華させるため、2人にはこれまで通りさらに普通に無駄なく働いて欲しいのだ。

（鴨）



『侍の翼』
好村兼一・著
（文芸春秋社　1,667円）